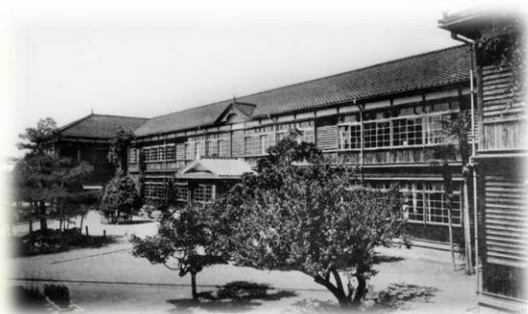


# 大西山の学校 150 周年 こぼれ話と追記 (+戦争中の記憶)

津幡小学校創立150周年記念誌別冊



津幡小学校創立150周年記念事業記念誌部会応援団

# 大西山の学校 150 周年 ごほれ話①

## 上の運動場と下の運動場(広くなったのは昭和 10 年頃)

令和 6 (2024) 年現在 60 歳台後半から上の方々にとって、津幡小学校といえば真っ先に坂の上の松の木と上の運動場、下の運動場が思い浮かぶでしょう。現状の大西山より 2.5メートル程高かった昔の木造校舎時代、松の木の奥の正面玄関から入って奥に講堂、その向こうは上の運動場、右へ行くと崖のノリ面を斜めに下りて下の運動場がありました。昭和 41 年、鉄筋校舎を新築する時に旧校舎や講堂それに八幡神社側の畑地など高かった部分を削って下の運動場を盛り上げてフラットにしましたから、下の運動場の高さは今の高さよりはおそらく 6~7メートルも低かったと思われます。ですから崖の高低差はかなりのものでした。したがって雪が積もると格好のスキー場に変身したのです。スキーと言っても手製の「竹スキー」です。記念誌では矢田町長もここでのスキーが楽しかったことを書いています。懐かしの旧校舎の写真にも下の運動場での運動会の場面 (28P) がありますが全体像がよく写されています。



しかし明治 20 年に大西山に学校が出来てから約 50 年ほどは下の運動場はこんなに広くはなかったのです。平村元校長の思い出 (16P) によると「在学中に広がった」とあり、年表からは昭和 8 年に「町議会」で拡張の話題が上ったとありますからおそらく昭和 9 年か 10 年にあの形になったものでしょう。それまではどこか一部に「伝染病隔離病棟」があったようです。江戸末期の安政 5 年 (1858) コレラが流行り、明治 10 (1877) 年や明治 12 (1879) 年、明治 19 (1886) 年にも大流行があり全国で年間 10 万人以上の死者が出ていますから、津幡でも対策上大西山の一角に専用病棟を建てたのでしょう。詳しい記録は町史他各種の年表等に記録がないのでハッキリしません。

大西山は古くは前田の殿様も活用した「お城」がありましたが、その役目を終えてからは清水村の共同墓地や畑などに活用されていました。大西山は、「高台で四方を眺め雄大な気分になれる一等地」であり、「こここそ次代を担う子供たちの教育の場に最適」と明治 20 年、津幡の先輩たちは小学校の場所に選んだのです。共同墓地は北の方の裏山へ移転させ、畑は取り潰し、校舎を建てました。頂上部分の高台が校舎として、余分の所が運動場に充てられ、下の運動場はまだまだ整備されずにいろいろな「過去の遺産」がのこっていたと思われます。こうして大西山は河北の教育、文化の中心地に成長していったのです。やがて「下の運動場」になる部分も、小学校の成長とともに次第に整備されて、名実ともに「大小学校」に整えられました。

## 大西山の学校 150 周年 こぼれ話②

### 天皇陛下の御来訪 北村先生のこと

昭和22年10月に昭和天皇が津幡小学校運動場へ行幸されました。これは第2回の国民体育大会が石川県で開催された折、これに昭和天皇がご来県されたので、津幡へお立ち寄りになったものです。このため小学校は大修理、天皇は上の運動場から斜めに階段を降りられて下の運動場にしつらえた「お立ち台」に立たれて、隙間なく埋め尽くした町民の万歳を受けられました。記念誌28ページの写真が当時の物です。わかりにくいですが、お立ち台の裾を津幡小学校の校章を染めた幕で囲ってあります。



昭和32年4月には三笠宮様が石川県レクリエーション大会会場となった津幡小学校にお越しになられ、フォークダンスをなされています。この折に「お手植え」された松は鉄筋校舎時代も健在でしたが、校舎移転の直後あたりに枯れてしまい、今は残っていません。

皇室の関係から振り返れば、本校昭和35年卒の北村唯一さんを忘れてはなりません。北村さんは大西山から四つ角への道の途中、左側にあった「北村医院」の生まれ、小学校時代は学校の坂でのスキーや相撲を取ったり、中学高校では野球でショート2番バッターとしても活躍しましたが、東京大学医学部へ進学、アメリカ留学などの後博士となり東大医学部の教授を長く勤められました。平成15年、今の上皇陛下の前立腺がん全摘手術を執刀、成功させられました。卒業生には各分野で全国にも鳴り響く先輩が大勢いらっしゃいますが、学問分野での優秀な卒業生として、長く記憶に留めておきたいと思えます。

※宮内庁ホームページより抜粋

天皇后両陛下のご日程

平成15年1月18日(土)

天皇陛下のご手術について

天皇陛下には、1月18日(土)午前より東京大学医学部附属病院にてご手術を受けられ、ご手術は同日午後成功裏に終わりました。  
(1月18日(土)ご手術後の記者会見における皇室医務主管発言要旨)

天皇陛下の前立腺全摘手術は、本日午前執刀を開始され、3時間40分で無事終了いたしました。既に発表いたしましたように、手術は東京大学医学部泌尿器科と国立がんセンター泌尿器科の合同チームで行われました。

術者は6人で、東大チームは北村唯一教授、太田信隆助教授、高橋悟講師、がんセンターチームは、垣添忠生総長、藤元博行医長、及び山元清チーフ・レジデントの方々であります。手術は順調に進み、予定通りの手術ができ、前立腺の全摘除及び両側閉鎖リンパ節廓清は成功裏に終わりました。出血量は予定以下で、輸血量もあらかじめおりました自己血で十分間に合うものでした。また、術後の麻酔からのお目覚めも順調で、付き添っておられます皇后陛下、紀宮殿下とお言葉を交わされています。

『宮内庁ホームページ <https://www.kunaicho.go.jp/activity/gonittei/01/h15/gonyuin-h15.html>』20240609

## 大西山の学校 150 周年 こぼれ話③

### 修学旅行や運動会など

遠足、修学旅行や運動会はどなたにとっても懐かしい楽しい思い出です。古い時代はどうだったのでしょうか。記録を探してみると

明治19年9月、「金沢へ修学旅行、博物館を見学」の文字が残っていました。130年以上も前の事、鉄道はありませんし自動車もありません。おそらく当時の生徒たちは歩いて往復したのでしょうか。博物館は金沢のどこにあったのか、何を見たのか詳細は分かりませんが、往復40キロの道を隊列を組んで歩いたものと思われます。

明治21年6月8日から10日にかけて「高等科(10～12歳)医王山へ修学旅行」の記録もありました。今のような青少年向けの宿泊施設が整っていたとは思えませんから、寺か民家の協力を得たのでしょうか、医王山で2泊して何をしたのでしょうか。スゴいですネ。

明治35年5月「七尾へ修学旅行」と記録されています。七尾線(当初は私鉄です)は明治31年4月に津幡口(本津幡駅)と七尾矢田新駅が開通していますからこれを利用したのでしょうか。現在とは比べ物にならないほど運賃は高く、時間もかかったでしょうに、文明開化の味を子供たちに味あわせようと考えたに違いありません。なんと先進的意欲的、さすが津幡小学校はエリート校です。

昭和27年ごろには、永平寺へ1泊で行っています。あの格天井の大広間で男女ザコ寝の写真が残っています。今なら大問題になるか?

運動会では、津幡小学校創立150年記念音声記録「大西山の丘辺にたてば」で池村さんのインタビューに「他校選手リレー」を語っていますが、なんとビックリ!!明治20年4月24日「本郡大運動会を木津浜にて開く」とありました。かほく市の木津海岸砂浜で河北郡内の小学校を集めて運動会をやったというのです。推測ですが多分高学年のしかも選抜された生徒を集めてやったのでしょうか。津幡から木津まで徒歩で行って運動会をやって、また歩いて帰ったことでしょう。

スゴいですね、楽しいですネ。大正8年にまとめられた「河北郡史」には『尋常小学校6年生以上の児童の体育を奨励するため郡費をもって「総合体育大会」を開催す』とあって、毎年この運動会が開催されていたことを昭和初期生まれの先輩たちは証言しています。



# 大西山の学校 150 周年 こぼれ話④

## 校歌のことなど

「古城址に河北の花と太西山の丘辺に立てば」お馴染みの昭和35年秋に「新しく制定」された津幡小学校の校歌です。もう60年以上前のことですから、この校歌を歌って卒業した方は5千人近くになるでしょう。それまでは「ぼくらの学校よい学校 太西山の丘の上」が「校歌」でした。元気のよいリズム感あふれる子供らしい校歌でした。

戦後教育制度が一新され、6・3・3制になり、教育の中身も新しくなって元の校歌は廃止されたので、昭和23年募集によって新校歌を作ることになり、当時2年に在学していた橋安治君の作品が選ばれ、これまた津幡小で教鞭をとっておられた羽喰夏枝先生が作曲された「いわば自前」で創り上げた「校歌」です。記念誌でも矢田町長や飯田元校長、卒業生の池野さん、杉本さんが懐かしく取り上げられています。このように親しまれた「ぼくらの学校」でしたが、あまりにも子供らしく「幼稚な感じ」があって、進学した津幡中学校でそれぞれの「母校の小学校校歌」を歌う時など「恥ずかしい」という声が上がって、今の「古城址に」が新しく制定されたというエピソードが残されています。

これより前の校歌(楽譜は残っていましたが)、今回150周年を機会にコーラスグループ「コールあじさい」の皆さんによって音声として復活、式典で披露されました。

「うましね実る河北野の」ではじまる歌詞は、昭和13年文部省認可という公に「認定された」小学校校歌でした。このような「認定校歌」は他の小学校にもあったのでしょうか？井上小、中条小や宇野気小、高松小などはどうだったのか、調べてみたい気がします。「とおときみこのいでまして」「御国に尽くす民たらん」など「皇国」が叫ばれた当時の日本の国家情勢が強く反映された背景を感じます。もう一点この認定校歌の前に校歌はなかったのかという疑問があります。明治大正時代すでに「一高」とか「四高」には校歌や寮歌はありましたし、明治大学や早稲田大学の校歌などは盛んに歌われていたのです。創立以来60年以上の間、津幡小学校には本当に校歌はなかったのか？素朴な疑問が残っています。(150年史のために調査した限り存在は確かめられませんでした)

津幡尋常小学校校歌  
昭和十三年三月十五日  
文部省認可

一、うましね実る河北の野  
湖みゆる丘の上  
遠き昔の夢のあと  
里のほこりの名所に  
とおときみこのいでまして  
いよよ栄ある津幡校

二、ああ何の幸天地の  
栄ゆるみよにおわれら  
大和心の一すじに  
学びをほげみ健やかに  
正しく強くおいいでて  
御国に尽くす民たらん

## 大西山の学校 150 周年 こぼれ話⑤

### 戦争の痕跡・・・報国農場のことなど

記念誌の年表 10 ページ昭和 18 年の稿に「庭球場が報国農場」という文字があります。第 2 次世界大戦末期には食糧事情が悪くなって、農家でなくてもそれまでは庭であった所を畑にしたり、狭い空き地にも豆や芋を植えて足しにする家庭が多くありました。小学校も例外でなく、大西山の忠魂碑北側にあったテニスコートも開墾され、芋畑になりました。もちろん高学年の勤労奉仕です。更に八幡神社との間にあった学校教育用の畑地は当然食糧増産に当てられましたし、上の運動場と下の運動場のガケにはカボチャが植えられました。戦後、崖にあったいくつもの穴ぼこはその名残ですし、南側に掘られていた大きな穴は「防空壕ではなくて芋穴」だったので



昭和 16 年勤労報国隊

戦後、これらの畑は次第に元の形態に戻されました。

テニスコートは町内愛好家の皆さんが手造りで「魚のトロ箱」を崩して腰板にしたり、ローラーを引っ張って復活しました。カボチャの棚になった穴ぼこは、竹スキーの今の言葉で言えば「モーグル」のような感じで楽しませてくれたものです。

竹スキーといえば大西山の正面の坂が「直滑降」に最適で、「車社会以前」ですから事故の心配もなく多くの児童が楽しんだものでした。木造校舎時代に卒業した方にとっては忘れられない「小学校の思い出」でしょう。竹スキーの他に「竹ぼこり」という孟宗竹を縦半分にして鼻緒を立てて下駄のような格好の手製スケートも作って雪でカチカチに固められたツルツルの道路でスケートを楽しんだのも昭和 25、6 年ごろまででしょうか、車の普及とともに交通安全の観点から姿を消しました。

## 大西山の学校 150周年 ごぼれ話⑥

### 戦争の影響・・・遺族、給食など

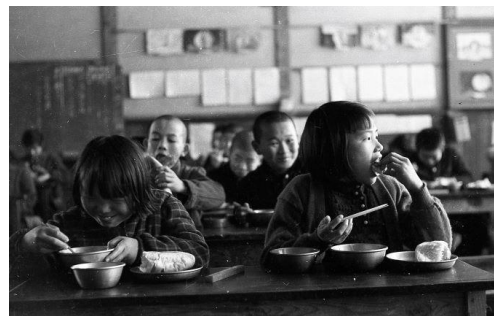
150年の間には日清、日露、支那事変、太平洋戦争など大きな戦争が起こり、小学校はもとより日常の生活にも重大な影響をもたらしました。大西山の丘の上には、今もこれらの戦争で亡くなられた方々を顕彰する忠魂碑が建っています。

中でも昭和16年に開戦した太平洋戦争(第2次世界大戦)は直接間接に影響が大きかったと思います。記念誌の年表にも幾つか項目が並んでいます。

「戦争遺児」について卒業生の池野忠さんが書いておられますが、戦争で父親が戦死した遺族の問題は忘れてはなりません。大黒柱を失うことは精神的にも経済的にも打撃は大きいのです。今日のシングル問題とは全く趣を異にしています。

「母子寮」はその遺児家族を受け入れる「公の複合住宅施設」で、数世帯が生活していました。遺児たちが成長して自立できると解体され、跡地は「おおしろこどもの広場」になりました。戦後数年は食糧難で主食のコメはもとより様々な生活用品も配給制で制限を受けました。したがって学校給食は出来るわけもなく、「制服」も強制できなかったもので、児童たちはみんな「ある物を着る」「おさがりが当たり前」「継のある洋服」で過ごしたものです。

「お弁当」を持ってこられる児童ばかりではありませんでした。お弁当といっても赤めし、コーリャン混じりのお弁当などでした。また、2割くらいが「家へ帰って残り物を食べてくる」あるいは「家に帰って食べたふり」をして午後からの授業に出る者もいたのが現実でした。そんな「欠食児童」を救済する目的もあって、当然「栄養バランスの良い食事の提供」の目的もあって「学校給食」は昭和30年ごろから始まり



昭和30年の給食

だしたのです。池村さんが記念誌音声記録「大西山の丘辺にたてば」のインタビューで語ったように「脱脂粉乳」「こっぺパン」からのスタートでした。現在の児童や校長先生が語るような「素晴らしい給食」は半世紀以上の努力や工夫のもとに行われているのです。

# 大西山の学校 150 周年 こぼれ話⑦

## 戦争の爪痕・・・疎開など

150周年記念事業が準備に入らんとした年にウクライナで戦争がはじまり、150イヤーにはイスラエルでも戦争がはじまりました。爆撃や食糧難から大勢の子供を中心に避難民が悲劇を生み出しています。太平洋戦争で日本の旗色が悪くなり始めた昭和18年ごろから、東京や大阪から多くの避難民・疎開する人々が親戚知人を頼って津幡にもやってきました。記念誌にも触れられていますが、女優の故野際陽子もその一人、加賀爪に疎開したのです。個人的な疎開だけでなく集団疎開で、津幡小学校は大阪市の都島小学校を受け入れました。人数の関係から井上小と能瀬小にも分散して受入れ、彼らは戦後20年10月まで徳願寺で寝泊まりしたのです。児童だけでなく教師も数人付いてきたことが記録されています。筆者の小学生時代(昭和23～25年頃)にも一クラスに2～3人は残っていた記憶があります。言葉や環境の違う都会から逃れてきた人たちは、住むところ、食べる物、頼れる人も少なく、苦労の連続だったと思われまます。このようなことは、二度と起こしてはならないこと、150年の歴史の中でも特に「教訓」として残さねばなりません。授業の中にも戦争は遠慮なく入り込みました。軍事教練、整列や竹やり訓練、消火訓練、精神訓話など軍人さんが学校の中を闊歩したのです。戦争末期には「勤労働員」と称して、高学年は軍事工場の働き手として毎日工場へ出勤する経験を語ってくれる先輩もおられます。「うましね実る」の校歌を歌うどころではなかったと嘆かれた高齢者もありました。教室の一部に軍人さんが駐在したことも記録しておきたいと思います。

補足：集団疎開の受け入れについて

(大阪市) 都島区からの学童集団疎開

都島区からの学童集団疎開の疎開先は石川県でした。(途中省略) 冬の石川県は都会の子どもたちには厳しいものでした。

### ■南都島国民学校

1年1名 2年12名 3年77名 4年81名 5年78名 6年105名計 男193名 女161名  
計354名/教員19名 寮母16名 作業員13名

●七尾線高松駅/石川県河北郡高松町/浄専寺 光専寺

●横山駅/石川県河北郡七塚町/正楽寺 光専寺

●宇野気駅/石川県河北郡七塚町/龍賢寺

●宇野気駅/石川県河北郡宇野気村/教証寺 誓海寺

●本津幡駅/石川県河北郡津幡町/弘願寺 徳願寺

出展：大阪市内で戦争と平和を考える会ホームページ

『<https://jinken-kyoiku.org/heiwa/my-sokai.html#Anchor-55651>』 20240609

※一部修正 (木津幡駅→本津幡駅、広願寺→弘願寺)



## 大西山の学校 150 周年 こぼれ話⑧

### 八朔大相撲のこと

学校教育とは関係が無い事ながら、津幡小学校を語り、懐かしむときには八朔大相撲を抜かすわけにはいきません。記念誌でも池村さんや稲垣校長が触れていますが、昭和の卒業生にとっては大きなインパクトを残しています。もともとは、天正13年（1586）末森城の合戦に勝った前田利家が本営を置いていた津幡で弘願寺の僧兵や土地の若い衆を集めて相撲大会を開いたのを機にその後弘願寺の報恩講ごとに相撲が弘願寺境内で行われていました。明治12年弘願寺が焼失したのを機に清水八幡神社境内に移り、これが昭和10年、八幡神社隣の小学校「下の運動場」が拡張されたため、ここが会場となり、以来今日に至るまで昭和45年に全国選抜社会人相撲選手権大会と名称変更をしながらも続いています。会場の北と西側がすり鉢型の観客席になる



昭和29年八朔大相撲

等好条件もあって大勢の観客が県内からも押し寄せて、相撲だけでなく四つ角から学校の坂道や校庭にまで露天商がテントを並べて夜遅くまで、それはそれは賑やかな一大イベントでした。九月一日始業式を済ませた子供たちは露天商が目当て、金沢・高松・羽咋方面から集まってくる大人たちは相撲をダシに一杯飲んで稲刈り前の休日を楽しんだ一日でした。夜中12時前後に大

関が決まり相撲が終了すると、観客を乗せて本津幡駅から七尾線の臨時列車が上り金沢方面行き、下り羽咋方面行きが発車する大イベントだったのです。庶民の娯楽が少なかった時代の象徴でしょう。

その熱戦の土俵を使って、校内相撲大会が開かれていました。

学校のお隣、清水八幡神社の拝殿には大正末期からの大関の氏名が年代順に書かれて大きな額になって掲げられています。一度ご覧になってはいかがでしょうか。



校内角力大会

# 大西山の学校 150 周年 こぼれ話⑨

## 令和の校舎、そのむかし

120余年の大西山時代からその東南へ降りて新校舎が移転新築されたのは平成23年春2011年のことでした。明るくてのびのびとして木のぬくもりのある素敵な校舎で、これからの津幡町・日本を担う子供たちが学んでいます。この場所はそれまでは河北で最初の大型ショッピングセンター「スカール」があり、閉店後は町の所有管理地でした。スカールは昭和48年の開業で当時としては最新の大型モールでにぎわったものです。その前はといえば石川織物(株)の織物工場でのこぎり屋根の大きな工場が建っていました。ふれあい広場もこの工場の一部でしたし、職員総勢250人のうち秋田、山形、富山、能登方面からの集団就職200名ほどの女子織姫たちが寮生活をしていました。8月の工場主催の盆踊り大会は、河北で一番大きくあでやかで楽しかったものです。その工場は織物工場として昭和16、7年に操業を始めたのですが、戦争末期の19年には軍需工場に切り替えられ、津幡小学校の上級生は勤労働員されエンジン部品などを作っていました。工場が建設される前の昭和前期までは、一帯は蓮根田でした。そこに現在の交流センターあたりに小高く盛り上がっていたゲンジヤマ(源氏山とも下知山とも)を崩してトロッコで運搬し埋め立て、工場用地にしたのです。ゲンジヤマの名残は工場が取り壊されスカールに変身する際に、完全にフラットにされ痕跡はなくなりました。僅か70年余りの間



に蓮田から織物工場、軍需工場、再び織物工場、ショッピングセンター、そして小学校へ変貌を遂げた津幡町清水リ123番地、これからの大きな成長を町民皆が期待して見守っています。



昭和32年の運動会

## 大西山の学校 150 周年 こぼれ話⑩

### 「子守学校」など付設された教育機関など

津幡小学校が「津幡小学校」(誇りある、特別な印象のある)たる由縁は、大西山に明治30年「夜学校」、同32年に「子守学校」、同37年「河北郡立図書館」、同39年「農業補習学校」「裁縫学校」などの教育文化施設が立て続けに設立されたことも大きな要因であると思われます。他の小学校にはない動きです。なかでも「子守学校」は5代校長河村音吉氏が、明治32年(1899)当時の町長などと相談して立ち上げた「私立的学校」です。その頃は学費の負担もあり、特に女子は年少の頃より初等教育を受けることなく裕福な家庭へ子守や行儀見習いの形で奉公に出ることが普通でした。このため低俗な風潮に染まりやすく問題も多かったので、1週間に3日、午後2時間で修身、読書、算術、唱歌を内容とする「子守学校」を設立、教員が私的に資金を出し、町からの助成金と合わせて運営されたのです。奉公先の乳幼児を背負って登校し授業を受けた子守学校は町内で高く評価され、町の助成金も増え、大正4年には学則を改正して入学者の枠を拡大するなど、小学校が義務化されるまで続けました。今回の調査ではこのような学校は県内には見当たりませんでした。



明治37年(1904)、敷地内に河北郡立図書館(図書閲覧所)が設置され、在校生にとっては大きな福音で、よく利用されたことが記録されています。(津幡公民館発行おばあちゃんのこどもの頃)

明治39年(1906)、6年の小学校卒業生を対象に、3年間の農業を主体とした中等教育学校が農業補習学校として建ち、女子を対象に2年間の裁縫、家事を含む裁縫学校も敷地内にできました。こうした一連の初等中等教育機関が津幡小学校に集中的に開設されたことも、栄光ある伝統を築いた一因であることも忘れてはなりません。

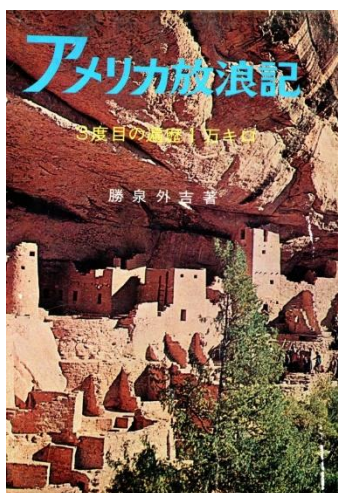
子守学校や裁縫学校の教科内容などは「れきしる」で見ることが出来ます。

## 大西山の学校 150 周年 ごほれ話 ⑪

明治の先輩・・・太田さん、勝泉さん

令和6（2024）年現在北国銀行津幡支店が建っているところに、江戸時代から醤油製造を家業とした太田屋さんがありました。その面影は津幡町史608ページに残されています。太田亥十二さんは明治27年3月に津幡尋常小学校を卒業、金沢二中から慶応大学に学ばれ、三井銀行に職を置かれましたが、途中で生糸貿易商社に転職され頭角を表し、京浜コークス社長から東京ガス会長まで出世されて東京財界の大立者として日本経済の重要人物になっておられました。昭和11年（1936）2月26日、陸軍内部の勢力争いから一部軍人が反乱を起こした「2・26事件」高橋大蔵大臣や斎藤内大臣らが暗殺され東京は非常事態でしたが、その暗殺者リストに太田亥十二さんの名が書かれています。太田さんは急遽身を隠し、難を逃れたことが公民館報昭和32年10月号に載っています。晩年は横浜市に住まいされ、「人形の家」創設に関わられるなど文化面でも足跡を残された偉大な卒業生の一人です。

現在パイワン商店街中ほどにある勝泉米穀店は、江戸後期から現在地でお店を持つ数少ない老舗ですが、明治22年2月27日ここで生まれた勝泉外吉氏は、苦学されアメリカにわたり長年各方面で活躍されました。戦後日本に戻り東京で住まいを持たれまして「民主主義」の普及や「生産性の向上」などの運動に全国を回られるなど戦後日本の復興の陰の力となった先輩です。津幡町でも講演会を開かれたり、書籍「アメリカ放浪記」を出版されるなど、津幡小学校明治期の卒業生として記憶に残しておきたいお一人でしょう。公民館報昭和30年10月号はじめ何回か寄稿されていますし、著書「アメリカ放浪記」は「れきしる」で読むことができます。



## 大西山の学校 150 周年こぼれ話 ⑫

### 大正、昭和の先輩たち

明治時代の卒業生の中から太田亥十二さん、勝泉外吉さんを紹介しましたし、昭和30年代に卒業された北村唯一医師の足跡も紹介しましたが、大正時代の卒業生の中では矢田富雄氏を忘れてはなりません。矢田氏は長く県議会議員を務められましたが、津幡川の大改修(昭和38年ごろから43年ごろ)と石川県森林公園の誘致発展(昭和42年ごろから47、8年ごろ)は矢田氏の力量なくしてはなしえなかったと評価されています。

昭和30年代、毎年のように津幡川は氾濫し、旧町はもとより全町に大きな被害を生じました。これは元の川が大きく蛇行していたこと、川幅が現在の半分程度であったことなどが原因とされました。これを解消すべく国や県を動かして現在の形になったのです。それ以降約60年、津幡町には大洪水はなかったのです。



津幡川改修起工式

令和5年7月、線状降水帯によって津幡川の水位が上昇し、支流の排水ができなくなり浸水し大きな被害をもたらしました。根本原因を究明して、一刻も早く改善し、安心安全な津幡町を作り上げなければなりません。また森林公園も本州で最大規模の公園として昭和58年全国植樹祭を開催するなど、その後も県民の健康増進に役立つ森林公園として親しまれています。ただここも令和5年の豪雨により被害を受け閉園中で、復旧が待たれます。

補足： 令和5年7月の線状降水帯による被害を受けた森林公園は、園内散策は禁止されていますが、アスレチック、バーベキュー場、デイキャンプ場、見晴台、緑化の広場は令和6年(2024)4月27日から再開されました。

「人と動物の共生する社会の実現」を目指し、石川県が設置、運営する「いしかわ動物愛護センター」も令和6年4月に開所しています。

# 大西山の学校 150 周年こぼれ話 最終回

## 「応援団」の事

今回の「150周年記念事業」については、津幡小学校とPTAが主力の実行委員会が当たりましたが、「応援団」なる影の組織が多少かかわっていたのが大きな特色だと思います。学校側は当初区長さんなどの地域の役員さん主体の組織を構想されていたようですが、結果的には「母校愛に燃え、更なる進展を期する自主的な卒業生」応援団が組み立てられました。輝く歴史と伝統ある津幡小学校ですから、津幡町民には母校を愛する卒業生が大勢生活し、活躍しています。この方々を「生かさな手」はありません。記念誌の中でも町長と教育長の祝辞、歴代校長の思い出にある平村、飯田両氏の文章には、自分の小学生時代の楽しい思い出があふれています。声を掛けた15人ほどの方々は様々な分野で、現役で働いている社会人、それがすべて肩書を外して「一卒業生として喜んでやる」ひと言で受けて頂いた卒業生です。こんな芸当は「津幡小学校」でなければ出来ないと自負しています。

筆者も一員として「記念誌部門」を受け持たせて頂きました。これは応援団メンバーだけではありません。記念誌に思い出を寄せていただいた方、インタビューを受けて頂いた方、皆「津幡小学校の卒業生」の誇りを持って参加して下さいました。戦前の校歌「うましね実る」を歌ってくださった「コールあじさい」のメンバーにも卒業生が数名おられて、これまた「お役に立てて嬉しい」と頑張ってくれました。

式典の第2部で見事なソロを披露して下さいました卒業生小泉詠子さん、サプライズで登場した関取「大の里」君、お二人とも多忙な中、時間を割いて東京から駆けつけてくださいました。

応援団は考えました。津幡小学校なら出来る、しかも津幡小学校でしか出来ないことをやろう・・・と。その結果が実ったと思います。

このような「津幡小学校の卒業生」たちは、明治6年の創設以来実に多くの先人たち皆さんに支えられ、守られ、育てられてきた津幡小学校の「空気」の中から生まれてきたのです。この「大事業」を我々は忘れることなく、後輩たちに伝えていくことが、151年目からの「仕事」ではないか、この感慨をもって「こぼれ話」の完結とします。

大西山の学校150周年 こぼれ話

文責：岩井 嘉樹（津幡小学校昭和29年度卒業）

令和6年6月

津幡小学校創立150周年記念事業  
記念誌部会応援団（ ）内は卒業年度  
岩井 嘉樹 (S29)、長 和義 (S42)、  
林 利治 (S50)、前後 創 (S52)





# 津幡小学校創立150周年を機に

## 戦争中の記憶

「150年記念誌」にも、「こぼれ話」にも触れられていますが、昭和10年代に始まり昭和20年8月15日に終わった太平洋戦争は、日本国の大きな転換点でありました。昭和13年小学校に入学され昭和19年の春6年生を卒業、高等科に進み、戦後の昭和21年3月に卒業された酒井治夫氏は、まさに戦時中に小学校生活を経験された方です。貴重な記憶を掘り起こして、以下の文章を寄せて頂きました。

### 追憶の記

酒井治夫

「お前たち、これからは社説を読む人間になれよ」K先生が言われたこの言葉は、昭和13年入学した小学校生活の中で一番記憶に残った言葉である。当時は情報を得られるものは新聞とラジオのみ。それが揃って軍国主義一色、そして学校教育もこれ一色。かくして私も立派な軍国少年に育っていった。

学校の正面玄関(職員専用玄関)から中央廊下より右側は男子校舎、左側は女子校舎と完全に分かれており、音楽室、理科室、図工室等特別科目の教室は左側にあり、その授業以外は左側に行くことはなかった。



昭和35年頃の校舎

### 模擬戦の事

数ある学校行事の中で軍国教育を最も発揮したのは「模擬戦」であった。毎年3月10日の陸軍記念日に、3年生以上と青年学校生を含めて「攻める側」と「守る側」とに分かれて攻防戦を展開するものだった。守る側は小学校が本陣、攻める側は竹橋より東荒屋、杉瀬と軍を進め、現在の中津幡駅後方の津幡墓山より鉄砲を撃ち合い(空砲)

実戦さながらであった。私はなぜか毎年責める側に配属され、まともに道を進めば敵に発見されるからと、田んぼの中を進んだ。当時は3月でも田んぼには雪が残り、自由に進めた。現在では3月10日に田んぼに雪があることはほとんど考えられないが、やはり地球温暖化が進んでいるのだろう。お互いに「斥候」(偵察隊)を出し合い場合によっては「捕虜」にされるなど、かなり本格的な戦争訓練だった。

### 金属供出、炭暖房、農作業など

戦争が激しくなり、軍の装備に鉄が必要となり、民間の工業製品は生産が止まり、一般民家にあった金属製品(鉄製の火鉢や花器など)を供出させて、お寺の梵鐘も無くなり、小学校の西側校舎前にあ

った「楠木正成の銅像」もいつの間にか姿を消した。冬場の教室の暖房は大きな火鉢が1個のみ、そこに炭が入り弁当箱を並べたのも懐かしい。その炭も平谷の集落まで生徒たちが出かけて1俵ずつ担いできたも



のである。食糧生産のために、硬いテニスコートを掘り起こしてサツマイモを植えたし、運動場の崖にはカボチャを植えた。便所の汲み取りも自分たちで行い、芋畑の肥料とした。堆肥造りのために草刈り作業を競ってした。誰がどれだけ刈ったか毎回記録させられ、後日集計して上位の者には「筆箱」などの賞品が出た。その他生活必需品も配給制の切符が出されていて、使い切ってしまうと品物が手に入らない時代であった。

### 楽しかった海水浴、映画会、大雪の思い出

プールなんてものはない時代、白尾の浜まで隊列を組んで歩いて遠足を兼ねて海水

浴に行った。この海水浴兼遠足は戦後もしばらく続いていた。途中狩鹿野の神社で一休みしたが、そこに湧き出ている水のうまい事！海水浴とは別の楽しみの一つだった。近年は浜辺が浸食によって狭くなっているが我々の頃は結構幅があって、海に入るまでは熱い熱い砂の上を全速力で走ったものだった。

小学校時代の一番の楽しみは映画会。たしか年に2回くらいあったと思う。全校児童が講堂に集まり、暗幕を張り巡らして映画を見るのだが、どんな映画だったか、戦争物が多かったと思う。中にドイツでの「ベルリンオリンピック」の記録映画があったと記憶している。

昭和10年代は雪が多く、毎年登下校に苦労した。今のように融雪道路があるわけでないし、除雪車があるわけがない。道も今より狭く、両側から屋根雪下ろしによって道路はさらに高くなって2階の高さ位のところを歩いた。家に入るには雪の階段を下りて、まるで地下室に入るようだった。除雪作業は人海戦術で、鋸で固まった雪を切り出してソリに載せ、近くの川まで運ぶのだが、全部の道が除雪してあることはないから、途中は登ったり下りたり、崖のようにそそり立ったところもあり、大人の人に抱きかかえて降ろしてもらったこともあった。

### 今の小学校の場所は、れんこん田、工場、スカール

私が入学した昭和13年、現在の小学校が建っている場所は蓮根田で、津幡地域交流センターや体育館あたりは「げんじ山」という低い山があった。入学した翌年から、



その山を崩して埋め立てて、織物工場を建設した。その工場は戦争が激しくなった昭和19年ごろに軍需工場となって、戦闘機の垂直尾翼や水平尾翼他を生産したので、私もそこに配属されエンジン冷却装置の一部を作っていた。

いわゆる「勤労働員」で、津幡高等女学校、金沢市立第二女学校の生徒たちもこの軍需工場で働かされていた。

戦後はもとの織物工場に戻ったが、そのあとショッピングセンタースクールに変わり、更に変わって津幡小学校になったのである。

### 疎開児童たち、・・・繰り返すな戦争の惨禍

小学校の6年と高等科の2年、戦争が次第に厳しくなり学校も戦争一色に染まっていったが、中でもそれを痛感したのは大阪の都島小学校の津幡の強制集団疎開だった。空襲から逃れるためとはいえ、1年生や2年生が親からひきはなされるこの現実、本当に可哀そうなことであった。ある日「オイ、お前ら、今度疎開してくる都島小学校の子供たちの布団が、津幡駅についているから取りに行ってこい」と命じられて、大八車を引いてそれを受け取りに行き、弘願寺まで運び込んだ。この布団を荷造りして出すときの親の気持ちはいかばかりであったろうか。親の胸中察して余りある。永遠の別れになるかもしれない、事実、その後の大阪大空襲で親を失った子もいただろう。こんなことを思う時、戦争だけは何があってもやってはいけないと、強く、強く思う。この声は次の世代にしっかりと伝えて行かなければならない。

### 平和の有難さ、人生を楽しく

色々なことがあったが、私は卒業して80年余り、戦争のない平和な時代を過ごしてきた。少子化問題が大きく取り上げられ、子供は宝物とはよくいわれている。この子供たちにこの先80年90年の平和が約束されているだろうか。世界のどこかで、今も戦争が続けられ、空襲がある。世界には「核爆弾」が1万発以上もあるという。果たして人間は地球上に生き残っていけるのか、子供たちに私が暮らして楽しんできた80年90年の生活は約束できるのか。

平和で楽しい生活が、づうーとづうーと続くように願っている。

# 津幡小学校にあった 「防空監視所」の話

70年以上も昔の話になるが、昭和16（1941）年生まれの私の最初の記憶は、富山大空襲である。昭和20年8月1日から2日未明にかけて米軍はB29爆撃機の大編隊を組んで富山市を空襲した。私は家の前に立って見たが、西の方から東南へ向かって幾拾機もの飛行機が飛び、倶利伽羅のはるか奥の空は赤々として（まことに申し訳ない表現ながら）きれいな光景であった。



富山電気ビルディングの屋上から  
空襲直後の富山市街を望む  
<https://www.city.toyama.toyama.jp/etc/kuushuu/>

太平洋戦争が長期におよび、日本は次第に敗色が濃くなり、毎日のように全国各都市が爆撃された時代、高台で四方が見渡せる津幡小学校は「防空監視所」にはうってつけの立地であり、西側校舎の2階左隅、裁縫室の上の屋根に急遽仮設の監視所が作られた。（令和世代の人は想像できないだろうが、レーダーが広く実用化されていなかった昭和中期の出来事である）そこは校舎と忠魂碑の間に建てられていた青年学校と隣接していて、監視所の人員は主として青年学校の生徒であった。当時そこでこの監視業務に携わったのが、太田地区に住まいして青年学校生



防空監視所の例  
浜松市文化遺産デジタルアーカイブより

だった加藤佐重郎さんである。令和5年2月、入退院を繰り返されていた加藤氏が在宅中と聞き、お訪ねしてお話を伺った。内容は以下のようなものである。戦争が激しくなり男は老いも若きも召集され戦地に送られたが、コメは兵隊にとっても最重要な農産品で、その担い手たった大きな百姓の長男だけは、召集されずにコメの生産を強いられて青年学校に通っていた。その時の仲間達は皆死んでしまっ

け残って寂しいこっちゃ。(この言葉は15分ほどの面談の中で数回繰り返された)監視所には昼も夜も交代で詰めており、県庁と毎日何回か電話で連絡していた。暇といえば暇な時間も多かった。友達と田んぼの話や召集された仲間の話などをしながら、遠くの空を見るのが仕事だった。弁当を持って通っていた。アンタ、今頃何のためにこんなことを聞きにくるがや?

加藤さんはその年の5月、94歳で亡くなりました。

仮設であった監視所は戦後台風で被害を受け取り壊されました。

2024年7月15日 文責 岩井嘉樹

大西山の学校 150 周年 こぼれ話と追記 + 戦争中の記憶  
文責 岩井 嘉樹  
編集 津幡ふるさと歴史館長 長 和義  
2024 (令和6) 年9月30日